

〈授業報告〉

古文指導についての一考察

村 松 龍

高校に入学した一年生にとって、古文は中学校で少しは学習しているものの、本格的に取り組むのは初めてのことである。

ある高校一年の教科書では古文の教材として、最初に「徒然草」の「仁和寺にある法師」が使われており、この教材で歴史的仮名遣いと、品詞の名前を学習することになっている。次に「宇治拾遺物語」の「児のそら寝」で文語の活用形の種類と助動詞と助詞の概略の説明、及び、係り結びの法則。「竹取物語」の「かぐや姫のおひたち」と「昇天」の部分とで動詞、形容詞、形容動詞の活用。「伊勢物語」の「東下り」と「筒井筒」とで過去、完了、断定の助動詞を学習。以下、二学期には「平家物語」の教材で推量、使役・受身・尊敬の助動詞。続いて「徒然草」の序、第十一、第三十二、第七十一、第九十二、第百九、第百四十一、第百五十、第百二十七段で敬語表現と格助詞を学習。その後三学期に「俳句」と「折りたく柴の記」の一部で残りの助詞をすべて学習することになっている。以上が一年生の古文の教材と、文法学習の年間計画になっている。そして、二

年生からは上代の言葉を習う他は、特に文法だけを取り立てて学習する計画はない。すなわち、一年生の文法を学習するときに十分理解できないと、そのまま古文の基礎的学習が消化不良のまま卒業してしまうことになる。事実そのような生徒は多いようである。

消化不良になる原因の一つは、初めての文法学習であるにもかかわらず理解させるのに十分な時間がかけられないことである。本校では古典文法の副読本をつかって一学期で歴史的仮名遣い。品詞の種類。動詞、形容詞、形容動詞の活用を終え、夏休みの補習で助動詞を一応終えることになっている。しかし、歴史的仮名遣いはともかく、品詞の種類は覚えられても品詞の識別がなかなか難しい。その前にまず単語に分けられない。単語に分け、品詞を識別できることが文法学習の基本だと思えば、中学校ですでに学習済みとしているのか、品詞の識別についての説明は教科書にはでてこない。それで、副読本を使つて説明し、次に、用言の活用や活用形について説明はするが、これら

は繰り返しドリルが必要な学習であり、一度説明を聞いたからといってすぐに理解し記憶できるというものではない。しかし、古文の週一・五時間の時間配当では、そんなにドリルに時間を割く暇はなく、いきおい家庭学習に頼らざるを得ない。本文の内容や単語の意味、時代背景、省略等の説明、その他指導しなければならぬ事柄は多い。何しろ初めて古文を読むのだから、まず読むことがなかなかできない。このような状態で落ちこぼれになっていく生徒が少なくない。

助動詞の説明として副読本の中では、「付属語で活用があり、自立語についてさまざまな意味を添えるはたらきをすることばを助動詞という。」と書かれており、一学期の教材で少しは取り扱ってきたが、夏休みに助動詞についての指導をするにあり、一学期が終わった段階でどの程度助動詞を指摘することが出来るか「徒然草」の第十段をつかって試してみた。

次にその誤答の例をいくつかあげてみる。

助動詞を指摘するテストの誤答例。

次の文中より助動詞を指摘せよ。

家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ。よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしきさらかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある

調度も昔覚えてやすらかなるこそ、ころにくしと見ゆれ。多くの工の心を尽くしてみがきたて、唐の、大和の、珍しく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは、永らえ住むべき。また、時の間の煙ともなりなんとぞ、うち見るより思はる。大方は、家居にこそ、ことざまは推し測らるれ。

後徳大寺の大臣の、寝殿に驚るさせじとて縄を張られたりけるを、西行が見て、「驚のあたらんはなにかは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ」とて、その後は参らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや縄をひかれたりしかば、かのためし思い出でられ侍りしに、誠や、「鳥の群れるて池の蛙をとりければ、御覧じ悲しませ給ひてなん。」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覚えしか。徳大寺にもいかなる故か侍りけん。

この誤答例から考えてみると次のように種類分けをすることが出来る。

- 一 用言の活用語尾と助動詞を混同する。④⑤⑥⑧⑩
- 二 助詞と助動詞を混同する。②⑪⑬
- 三 用言の活用語尾と助動詞をくつつける。⑦⑫⑭⑯
- 四 助詞と助動詞をくつつける。⑩⑬
- 五 一つの助動詞を分断する。①⑫
- 六 二つの助動詞をくつつける。③⑩⑮
- 七 助詞と助動詞を混同する。⑨

このような間違いをなくすためには、「一」「三」については用言の活用をしっかりと覚えさせること。「二」「四」については助詞と助動詞をよく覚えさせることであるが、助動詞には活用がありその全部を完全に覚えることはなかなか難しい。だいたいの教科書も副読本を助動詞を先に教えることになっているが、活用のない助詞をさきに教える方が理解し易いのではない。助動詞の学習が何といつても一番難解である。付属語で活用があるのが助動詞、ないのが助詞といつても、どの語が活用があるのかないのか初めて学習する生徒にはなかなかわかりにくい。助詞がとらえられれば残ったものが助動詞ということでは理解しやすい。「五」「六」については「き」「ぬ」「む」など一字の助動詞が間違われやすい。

また、助詞と同じ形をもった助動詞「し」「に」「な」「なむ」。動詞や形容動詞の活用語尾と同じ形をもった「す」「なり」などの識別が難しいようである。

この文中は三十六個、十七種類の助動詞があるが、正しく指摘できたのは平均してそのうち九個であった。

次にこの文中の三十六個の助動詞に傍線をつけ指示しておいて、その意味を次のような表の中から答えさせてみた。

傍線部の助動詞は次のどの意味か、最も適当なものを選び番号で答えよ。

一 過去・過去伝聞（「た」「たそうだ」）

- 二 詠嘆（「たなあ。―ことよ」）
- 三 完了（「た。―てしまう」）
- 四 強意（きつと―）
- 五 並列（「たり―たり」）
- 六 存続（―ている。―である）
- 七 推量（―う。―だろう）
- 八 過去推量（「ただろう」）
- 九 意志（―う）
- 一〇 適当・勧誘・丁寧な命令（「のがよい。―しませんか。―してください」）
- 一一 假定・婉曲（「―としたらそのような。―ような」）
- 一二 当然（「はずだ」）
- 一三 義務・命令（「ねばならない。―せよ」）
- 一四 可能（「―ことができる」）
- 一五 推定（「―らしい」）
- 一六 婉曲（「―ようだ」）
- 一七 反実仮想（「もし―たら―だろうに」）
- 一八 ためらいを含んだ意志・希望（「―ようかしら」）
- 一九 打消（「―ない」）
- 二〇 打消推量（「―ないだろう」）
- 二一 打消意志（「―ないつもりだ。―まい」）
- 二二 打消当然・禁止（「―はずがない。―てはいけない」）
- 二三 不可能推量（「―できそうにない」）
- 二四 伝聞（「―という。―そうだ」）

- 二五 断定（―だ。―である）
- 二六 受身（―れる。―られる）
- 二七 自発（―れる。―られる。しぜんに―なる）
- 二八 可能（―できる）
- 二九 尊敬（お―になる。―なさる）
- 三〇 使役（―せる。―させる）
- 三一 希望（―たい。―してほしい）
- 三二 比況（―のようだ）

このテストでは正解は平均五つであった。

このように文中に頻出する助動詞をマスターせずして古文を理解することは困難であるが、この助動詞の活用と文中でのさまざまな意味と接続とをマスターすることの困難さが古文を理解することの一番の足かせとなっている。

これらの助動詞をただ機械的に暗記させることは、能率も悪く忘れやすいばかりでなく、古文嫌いにさせる原因になる。おそらくいろいろ古文の作品などを読みながら少しずつ身につけていくのが一番いいのであろうが、現状では時間的にも無理であり、習う助動詞がかたよる心配がある。しかし、古文の作品を離れて、助動詞だけを取り出して丸暗記させるのは、いかにも味気なく古文学習に対する興味も意欲も失わせてしまうことになる。

そこで、高校での古文の学習についてどのような感想を持っているか、古文学習をほぼ終えた三年生に、二学期の時点で次

のようなアンケートをしてみた。

古文についてのアンケート調査（調査人数五〇八名、数字は人数を示す）

ア あなたは古文が得意な方ですか、不得意な方ですか。

1 得意（五七名、一一％）

2 不得意（四五一名、八九％）

イ それはいつごろからですか。

一 中学時代から

二 高一の一学期ごろから

三 高一の二学期ごろから

四 高一の三学期ごろから

五 高二の一学期ごろから

六 高二の二学期ごろから

七 高二の三学期ごろから

八 高三の一学期ごろから

ウ そうなった理由はなぜだと思いますか。

（得意と答えた人のみ）

一 小さい時から興味があったから。

二 昔のことに興味があるから。

三 理解し易いから。

得意	%	不得意	%
二二三	四一	一六二	三六
一三	二二	一三四	三〇
四	七	四三	一〇
一	二	二〇	四
四	七	三五	八
二	四	一二	三
三	五	六	一
六	一一	三四	八

人数	%
四	七
一二	二〇
八	一四

- 四 内容がおもしろいから。
五 成績がよいから。
六 その他

二一	三五
六	一〇
八	一四

- (不得意と答えた人のみ)
一 中学時代から不得意だった。
二 昔のことであまり興味がなから。
三 難しく理解できないから。
四 内容がおもしろくないから。
五 成績がよくないから。
六 その他

人数	%
六二	一四
二一	五
二〇九	四七
四〇	九
六六	一五
四四	一〇

エ 古文はどういうところが難しいと思いますか。(主なもの三つ以内)

- 一 動詞・形容詞・形容動詞等の意味や活用が難しい。
二 助動詞の意味や活用が難しい。
三 助詞の意味や用法が難しい。
四 和歌の修辭法などが難しい。
五 その他の文法的なこと。

得意	%	不得意	%
一三	八	一八一	一四
三一	二〇	二四一	一九
一七	一一	一五一	一二
一五	九	五八	四
一八	一一	九一	七

- 六 単語の意味を覚えるのが難しい。
七 主語などの省略が多いので難しい。
八 文全体の文意をとるのが難しい。
九 時代背景や習慣などがわからないので難しい。
一〇 その他

一九	一二	二一九	一七
二二	一四	九七	七
一五	九	二〇五	一六
六	四	四二	三
三	二	一一	一

オ いままでどんなことをしっかり勉強したらよかったとおもいますか。(2つ)

- 一 動詞・形容詞・形容動詞の意味や活用。
二 助動詞の意味や活用。
三 助詞の意味や活用。
四 和歌の修辭法。
五 その他の文法的なこと。
六 単語の意味を覚える。
七 古文を多く読む。
八 その他

得意	%	不得意	%
一四	一三	一五六	一七
二七	二四	二一八	二四
一一	一〇	四七	五
六	六	二一	二
六	六	五二	六
二四	二二	二三〇	二七
一九	一七	一六〇	一八
二	二	一〇	一

カ どんなことが古文の学力を養うのに役立つと思いますか。

- 一 動詞・形容詞・形容動詞
をしっかりとする。
- 二 助動詞をしっかりとする。
- 三 助詞をしっかりとする。
- 四 その他の文法的なことを
する。
- 五 和歌をしっかりとする。
- 六 単語の意味を覚える。
- 七 古文を多く読む。
- 八 その他

得意	%	不得意	%
四	七	四五	一〇
一一	二〇	八〇	一八
〇	〇	三	一
〇	〇	一五	三
〇	五		
一六	二九	一〇七	二四
二四	四二	一八四	四二
一	二	五	一

「ア」にみるように圧倒的に古文が不得意な者が多いが、「イ」の得意または不得意になったのは「いつごろですか」という問いに対して、いずれも一番が「中学時代」次いで「高一の一学期」と答えており、他の時期を大きく引き離しているのが注目される。古文に取りついた時点で、過半数の者が得意と不得意に分かれている。「中学時代から」は仕方がないにしても、「高一の一学期から」が大きい数字を示すのは、急に助動詞や活用など難しいことを詰め込まれるからであろう。それは「ウ」の答えにもよく現れている。不得意になった理由として、約半数の者が「難しくて理解できない」をあげており、したがって「成績がよくない」を合わせると六割をこえる。「得意」な者が答えた「内容がおもしろい」「興味がある」と対照的な答えで、

内容がおもしろくなく興味がないからではなく、難しくてわからないから不得意になるのがわかる。「エ」の「どういうところが難しいか」では、「得意」「不得意」とも助動詞をあげている。「オ」の「どんなことをしっかりと勉強すればよかったか」でも「得意」な者は一番、不得意な者も二番に助動詞を高い数字であげており、このことから助動詞の学習がいかに困難であるかがわかる。「カ」の「古文の学力を養うのに役立つ」とで「得意」「不得意」とも同じような比率で答えているが、「古文を多く読み」つつ、その中で、「単語」や、「助動詞」をしつかり身につけていくことが、生徒の求める、そして、最良の学習方法であろうが、それには時間が足りないというのが実状である。

そこで、最良とはいかないまでも少しでもそれに近づくために、古文に興味をもたせつつ作品の中で助動詞を学習する方法として、時間的なことも考え、百人一首の和歌の中からいくつか適当な和歌を選び、その和歌とともに助動詞を覚えさせるようにすれば、教材も少なくてすみ興味も湧くので意味も覚えやすいのではないか。まず助動詞を二応指導した後、和歌の指導をすれば助動詞の意味を定着させ、文中における訳を発展的にとらえさせるのにも役立つと考えた。

数えてみると、小倉百人一首には百五十六個、十八種類の助動詞が使われている（打ち消しの助動詞の古い未然形「な」を除く）。しかし、同じ助動詞が何度も使われ、全ての助動詞が出てこない難点がある。一番多く出てくるのは打ち消しの助動詞

「ず」で二十七回も使われている。次に完了の助動詞「ぬ」で二十三回、過去の助動詞「けり」が二十一回、過去の助動詞「き」と推量の助動詞「む」、断定の助動詞「なり」がともに十六回というのが頻出する助動詞である。百人一首全てを学習するのは大変であるし、この場合無駄が多い。そこで、なるべく使われている助動詞が重複しないように、あわせて助詞などの指導もできやすいように和歌を抽出してみた。

次に具体的にその和歌をあげると、

一 春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山（二）
この歌では完了の「に」、過去の「ける」、推定の「らし」が使われている。「けるらし」が「けらし」となったことを指導するとともに、「来」の読み方を「来（こ）ぬ」「来（き）ぬ」の例をひいて注意させ、「てふ」の読みと意味の説明も付け加えたい。「らし」は根拠を示して推量すること、推量の助動詞は八つもあるがそれぞれ違いがあることを触れておきたい。

二 みかの原わきて流るるいづみ川いつ見きとてか恋しかるらむ（二七）

ここでは過去の「き」、現在推量の「らむ」が使われている。「き」や「る」「かる」が活用語尾か助動詞かで間違ふことが多いので注意させたい。特に形容詞の補助活用の語尾が間違われやすいので補助活用の成立した

理由もあわせ、訳の上から助動詞の意味を説明したい。
また、この歌には、序詞（同音による）、掛詞、縁語などの和歌の修辭法、「か……らむ」の係り結び、「とて」の訳などについても指導したい。

三 山川に風のかけたるしがらみは流れもあえぬ紅葉なりけり（三二）

完了の「たる」、断定の「なり」、打ち消しの「ぬ」、過去（詠嘆）の「けり」が使われている。「たり」「なり」が「てあり」「にあり」が語源であることにふれたい。「なり」は特に動詞、形容動詞の活用語尾、伝聞推定の助動詞などと紛れやすいので、その違いを理解させたい。「ぬ」も動詞の活用語尾や完了の助動詞との相違を活用形の違いや、接続、訳の上から、その違いを説明したい。「けり」の過去と詠嘆の相違。あわせて「しがらみ」の意味。「やまがわ」と「やまかわ」の読みと意味の違いにもふれたい。

四 逢ふことの絶えてしなくはなかなか人に人をも身をも恨みざらまし（四四）

打ち消しの補助活用「ざら」、推量の「まし」。補助活用が動詞「あり」とくっついて成立したこと、「……は……まし」などの反実仮想の用法。また、「し」の過去の助動詞と助詞との違いについて指導したい。

五 あはれともいふべき人は思はえて身のいたづらになりぬべきかな(四五)

推量の「べし」は訳し方の多い語である。ここでは「当然」と「推量」の訳が出ている。完了の助動詞「ぬ」。また、「いたづらに」の訳と「に」が形容動詞の活用語尾であること、形容動詞の活用語尾と完了の助動詞の「に」の識別の指導。次の「なり」が動詞であることと併せて、助動詞との違いを理解させたい。「あはれ」と「かな」の品詞と訳についてもふれておきたい。

六 今はただ思い絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな(六三)

完了の「な」、推量(意志)の「む」、断定の「なら」があるが、「なむ」となるときの異同について、係助詞、終助詞の「なむ」を例にあげ、相違を説明しておきたい。終助詞については「小倉山峰のもみじ葉心あらば今一度の行幸またなむ」(二六)があるが、「ばや」との違いが他人に対する希望か、自分自身の希望かも理解させたい。また、「なら」の動詞との意味の違い。「もがな」の意味のついでに「もがも」「もが」「がな」についても指導したい。

七 音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ(七二)

打ち消し推量(意志)の「じ」は「まじ」とあわせて。「こそ……すれ」の係り結び。「もこそ」の特別な訳し方。「や」の係助詞と間投助詞との違いを指導したい。また、「掛詞」「縁語」もつかわれている。

八 契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり(七五)

過去の「し」。断定の「に」。推量の「めり」。「し」は「五」と関連させて助詞との違いを理解させたい。「に」は完了の助動詞、形容動詞の活用語尾、格助詞、接続助詞など同じ語形が多く紛らわしい語である。これらの違いについて十分説明しておく必要がある。推量の「めり」については語源の「見えあり」、また、ラ変型活用につくとき、「あんめり」「静かなんめり」と撥音便することが多く、「あめり」「静かなめり」と「ん」が表記されないうことがあっても指導しておきたい。ナ変動詞「いぬ」の「ぬ」について「三」と関連させてふれたい。

九 瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ(七七)

受身の「るる」。推量(意志)の「む」。また、「ぞ……思ふ」の係り結び。序詞(比喩による)、縁語がある。ここでは特に「……を……み」の訳し方について指導しておきたい。

十 ほととぎす鳴きつるかたを眺むればただ有り明けの月ぞ残れる（八二）

完了の「つる」。完了（存続）の「る」。これらの助動詞は一言で使われる「つる」の「て」「つ」「る」のすべての活用形が助詞や動詞の語尾と間違われやすいので注意させる必要がある。ここでは「有り明けの月」の説明と、「眺む」の二通りの意味も指導したい。

十一 世の中よ道こそなければ思い入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる（八三）

伝聞推定の「なる」。この語は動詞、形容動詞の活用語尾、断定の助動詞など同形が多いので見分け方を説明しておきたい。「こそ……なければ」、「ぞ……なる」の係り結び。「けれ」は形容詞の活用語尾と助動詞とが間違われやすい。

十二 嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな（八六）

使役の「する」。断定の「なる」。「やは……する」の係り結び。「する」はサ変動詞との違いに注意させたい。

十三 玉の緒よ絶えなば絶えね承らえ忍ることの弱りもぞする（八九）

完了の「な」「ね」。この活用形でてくるのは少ない

のでしっかりおさえさせたい。また、「未然形十ば」と「已然形十ば」の用法を理解させたい。「玉の緒」の意味、「忍ぶ恋」の説明。「もぞ」も「もこそ」と同じ用法なのであわせて指導したい。この歌の作者の境遇についても。

以上十三首の和歌で重複したものもあるが、小倉百人一首にでてくる全ての助動詞、過去の「き」「けり」、完了の「つ」「ぬ」「たり」「り」、打ち消しの「ず」、推量の「む」「らむ」「べし」「らし」「まし」「めり」、打ち消し推量の「じ」、受身「る」、断定の「なり」、伝聞・推定の「なり」、使役の「す」、計十八種類を指導したことになる。あわせて助詞や和歌の修辭法の一部についての説明もしたが、この十三首の和歌とともにこれらのことを学習することによって、和歌の内容に興味を持ちつつ、助動詞についてのかんがりの知識を身につけることができると思われる。小倉百人一首にでてこない助動詞は「むず」「けむ」「まじ」「らる」「たり」「断定」「さす」「しむ」「たし」「まほし」「じ」としの十種類である。

（むらまつ・りょう 徳島県立城ノ内高等学校教諭）

徳島大学方言研究会の御案内

主として徳島県方言を、言語学・民俗学的方面から研究しようという集まりです。現在山城町で調査をすすめています。詳細は総合科学部国語学研究室（内線二二二三）へ。